

魯迅先生東北大学留学百周年記念特別展

# 魯迅

## 留學生の中の歴史

明治二十七年六月一日

入學願



清國留學生

周樹



二十二年



# 東北大学史料館

仙臺醫學專門學校長山形伸藝殿



このたび、『魯迅先生東北大学留学百周年記念事業』の一環として、特別展「魯迅 歴史のなかの留学生」を開催するはこびとなりました。

百年前の9月、魯迅先生は、近代医学を通じて祖国の人々を救うことを志し、本学医学部の前身である仙台医学専門学校に入学されました。やがて彼は医学ではなく文学で祖国を救う道を選び仙台を去りますが、偉大な文学者・魯迅の形成に仙台での経験が持つ意味については、魯迅先生自身が繰り返し述べ、また魯迅先生に関心を持つ多くの研究者が注目するところでもあります。

魯迅先生の仙台留学を語る上で欠かすことができないのが、解剖学の教授であった藤野巖九郎先生との出会いです。藤野先生が毎週のように行った解剖学のノートへの細やかな添削は、医学生であった魯迅先生に非常な感激を与えたとのこと。仙台を去るときに藤野先生から贈られた、「惜別」と記された肖像写真を、魯迅先生は帰国後も書齋に飾り心の励みにされていたとのこと。

魯迅先生はまた、本学の歴史のなかに登場する最初の留学生でもあります。かつて戦前期には、本学やその関連学校に少なからぬ中国人学生が在籍し、その中には帰国後重要な役割を果たされた方も少なくありません。その後の不幸な時代を終えた今、本学では再び、多数の留学生を中国から迎えています。

現在本学には、学术交流等の目的で毎年多くの中国の方々が訪れ、また多くの中国人留学生が在籍しています。かつての留学生・魯迅に思いを馳せ階段教室や本学に残る魯迅先生の関係資料を見学されるのを見るとき、魯迅先生や藤野先生が、日本と中国、本学と中国の交流の架け橋としても重要な存在であることを、あらためて実感することが出来ます。

今回の記念展では、文学者・魯迅にとっての出発点であり、また同時に本学と中国との交流の原点でもある、魯迅先生の仙台留学時代について、さらには魯迅先生に続いて仙台の地を踏み、本学のキャンパスで学んだかつての留学生の様子について、本学所蔵の関係資料等を通じ皆様にご紹介したいと思います。かつてこの地で、魯迅先生をはじめとする留学生たちが学び感じたことを知ることを通じ、現在そして将来の日中の相互理解、学术交流が一層促進されていくことを、強く念願しています。

開催にあたりましてご協力をいただきました関係各位に対し、この場を借りて御礼申し上げます。

## 魯迅 略年譜



本名は周樹人。浙江省・紹興生まれ。幼少時代を紹興で過ごし、17歳のとき南京に出る。1902年春に江南陸師学堂付設鉅務鐵路学堂(陸軍学校付属の鉅山・鉄道学校)を卒業し、官費留学生として来日、東京で留学生教育機関である弘文学院に学ぶ。その間『浙江潮』等の同郷会誌に論文や小説を執筆する。

やがて医学を志し1904年9月仙台医学専門学校へと入学。しかし在学中に文学者としての道を歩むことを決意し、1年半後に退学。再び東京に戻り、文学雑誌の創刊、小説の執筆など、文芸活動に取り組む。

1909年に帰国後、辛亥革命に伴い中華民国臨時政府の教育部(文部省)に勤務するが、やがて陳独秀らが主唱する文学革命論に呼応し、1918年「魯迅」の筆名で『狂人日記』を発表する。その後『故郷』『阿Q正伝』等の代表作を次々に発表。同時に鋭い社会・文化批評を展開したが、やがて軍閥政府や国民党政府の弾圧を逃れ上海へ移住、晩年をこの地で過ごした。1930年には左翼作家連盟の結成に参加している。

儒教批判と口語文の提唱を柱とする「文学革命」を作品の中で実践し中国近代文学の基礎を築き、また絶えず鋭い社会・政治批評を展開した、20世紀前半の中国を代表する文化人。美術にも関心が深く、上海時代には木版画講習会を開催し若手版画家の育成に尽力している。

- 1881年9月 浙江省紹興県に生まれる
- 1898年 故郷を離れ、南京の江南水師学堂に入学
- 1902年3月 南京・江南陸師学堂付設鉅務鐵路学堂卒業
- 4月 南洋官費留学生として来日、東京弘文学院に入学
- 1903年3月 翻刻『月界旅行』刊行
- 1904年4月 弘文学院卒業。その後仙台医学専門学校に出願
- 9月 仙台医学専門学校入学、佐藤屋に下宿。
- 11月 宮川家に下宿を移す。
- 1905年4月 春期休業中に許寿裳らと箱根旅行
- 7月 第一年級学年試験、二年級に進級。
- 1906年3月 仙台医専退学、同級生有志による送別会。
- 4月 東京に移住、ドイツ語学校に在籍しつつ文筆活動。
- 1907年7月 許寿裳らと文芸誌『新生』を計画するが挫折。
- 1909年8月 帰国。杭州・紹興で教員生活
- 1912年2月 中華民国臨時政府教育部に勤務。やがて北京へ。
- 1918年6月 「魯迅」の筆名で『狂人日記』発表
- 1920年8月 北京大学講師となる。
- 1921年12月 『阿Q正伝』発表
- 1923年6月 初の小説集『吶喊』発表(序文で仙台時代に触れる。)
- 1926年12月 「藤野先生」発表
- 1927年1月 広州へ移住、中山大学教授となるがやがて辞職。
- 10月 上海へ移住
- 1936年10月 逝去

# 東京から、仙台へ

中国留学生会館の入口の部屋では、本を若干売っていたので、たまには立ち寄ってみる価値はあった。午前中なら、その内部の二、三の洋間は、そう居心地は悪くなかった。だが夕方になると、一間の床板がきまってトントンと地響きを立て、それに部屋中煙やらほこりやらで濛々となった。消息通にきいてみると「あれはダンスの稽古さ」ということであった。

ほかの土地へ行ってみたら、どうだろう。

そこで私は、仙台の医学専門学校へ行くこととした。

(「藤野先生」より)

17歳のとき故郷・紹興を離れ、やがて南京の江南陸師学堂商務鐵路学堂において近代科学の一端に触れた周樹人は、1902年(明治35)春にここを優秀な成績で卒業し、浙江省の官費留学生に選ばれ日本の上を踏む。20歳のときである。

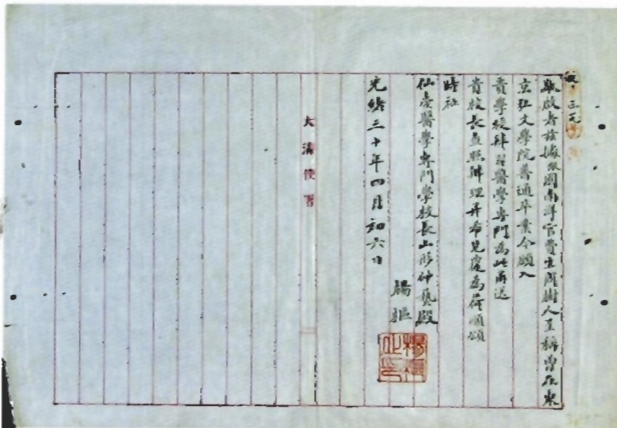
東京で彼を待っていたのは、その数年前から急激に数を増やしていた、「清国留学生」たちの社会であった。彼らはそのころ次々と開設された弘文学院などの留学生向けの学校で「速成教育」を受けるとともに、留学生会館や同郷会組織に集い、政治や社会、文化について語り、行動した。「留学生会館」は、そんな彼らの社交の場であり、結束の場であった。彼もまたこの留学生社会の一員として、浙江省の同郷会誌である『浙江潮』に小説や論文を投稿したり、学校の教育方針に抗議するストライキに参加したりしている。生涯の友、許寿裳と知り合ったのもこの時期であった。

しかし「藤野先生」に語られているように、周樹人は一方で「留学生会館」に象徴される留学生社会に対し、冷めた視点をも持っていた。医学によって祖国の人々を救おうという意志を固めた周樹人は、弘文学院卒業後の進学先は、仙台の医学専門学校を選んだ。留学生が誰もいない場所、というのがその理由であった。



紹興出身学生との記念写真(1904)

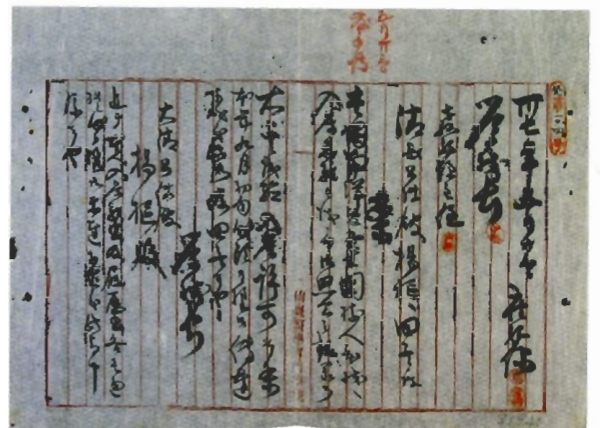
後列右:周樹人 後列左:許寿裳



周樹人の入学に関する清国公使館の照会状

光緒30年4月6日(1904年5月20日) 当館蔵

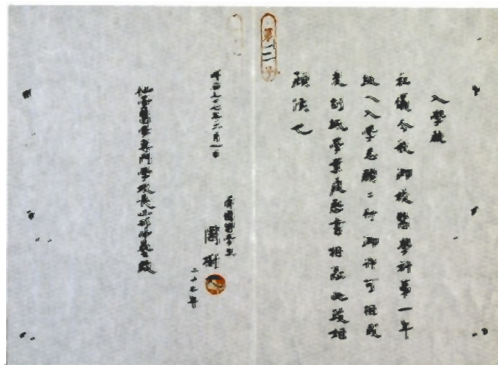
留学生を管轄する清国駐日公使楊菊が、南洋官費留学生周樹人の仙台医専への入学について山形校長宛に打診した文書。



周樹人入学の件に関する清国公使館宛回答文書案

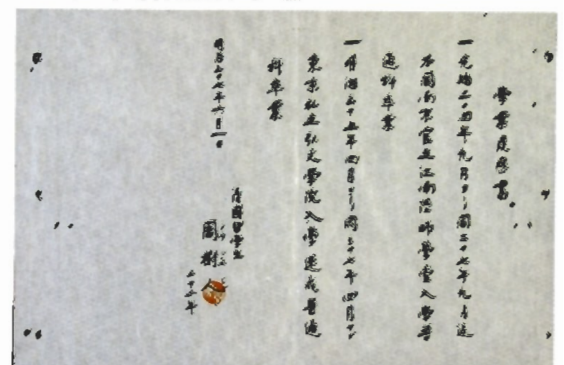
明治37年(1904)5月23日 当館蔵

周樹人の無試験入学を許可する旨を山形校長名で公使館に回答した文書の案。照会状受信後即座に起草・複製したもので、願書・履歴書を出させること、九月初旬に学校へ出頭させることを本人に伝えるよう指示している。



周樹人入学願 明治37年(1904)6月1日(復原)

清国公使館を通じて無試験入学許可の内諾を得た周樹人は、学校側の指示に従い、自筆の入学願書と履歴書を提出した。



周樹人学業履歴書 明治37年(1904)6月1日(復原)

入学願書の添付書類として提出されたもの。「南京官立江南陸師学堂」普通科、「東京私立弘文学院」速成普通科を卒業したとある。

# 医学生・周樹人

「学校の勉強は大忙しで、毎日一息つくこともできません。七時にはじまり午後二時には終わるのですが、小生は朝寝坊ですからこれはまったく仇です。課目には、物理、化学、解剖、組織、独乙などがあり、みな猛烈な速さで目が回るようです。組織と解剖の二つの用語は、ラテンとドイツを併用し、毎日暗記せねばならず、頭がたちまち疲れます。幸い先生のことはまだなんとか理解できますので、もしうまく卒業できたら、人殺しの医者にはならずすむだろうかと思っています。」（1904年10月蔣抑庵宛書簡）



二高・仙台医専正門  
現在も門柱が残されている。

周樹人が入学した仙台医学専門学校は、1887年(明治20)に第二高等中学校医学部として発足し、1901年(明治34)に専門学校として独立した。のち東北帝国大学の医学専門部となり、同大学の医学部発足に伴って廃止された。周樹人が来仙した当時は北日本唯一の医学専門学校であり、東北地方を中心に全国各地で活躍する多数の医師を輩出。入学志願者の増加により定員増や施設整備が図られていた。



仙台医専構内

東門内側の桜並木、いまの片平購買部北側。

1904年(明治37)9月12日、明治37年度の入学式が片平キャンパス内の講堂で行われ、周樹人は医学生としての生活をスタートする。同級生は前年度からの落第組を含めて145人。翌日からは授業が開始された。入学直後の友人への書簡で周樹人は、周囲の日本人学生を

「ここ数日向こうの学生社会にもかなり入ってざっと推察してみました。その思想、行為は決してわが震旦の青年の上に出るものではないと敢えて断言しましょう。ただ社交が活発な点では連中の方がうわ手です。…」(前記 蔣抑庵宛書簡)

と分析している。彼にとって仙台医専での学生生活は、たった一人で「日本人学生社会」のなかに入っていくことを意味していた。

後に同級生が語る場所では、日本語での会話に殆ど支障なく、タバコを好み同級生によくこれを勧めたという。教室では前から2、3列目の中ほどに座ることが多かったらしい。



## 右:同宿生との記念撮影 明治38年(1905)

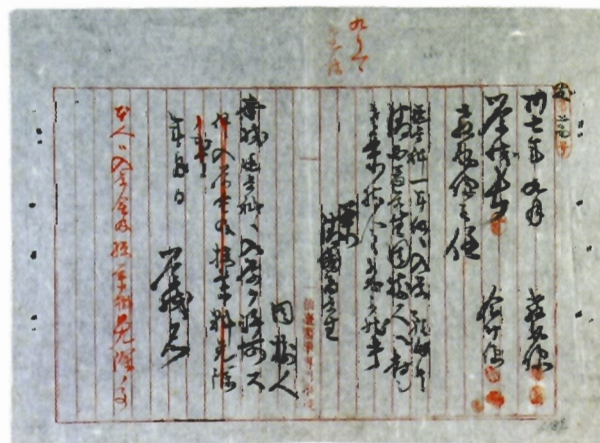
2番目の下宿・宮川家での同宿生たちと。写真左上が周樹人。その左下が二高の留学生・施霖。髪は主人が後に書き加えたもの。裏面には8年後の学生達の状況が書き込まれているが、「周君」「施君」はともに「不明」と書かれている。周樹人は入学当初「佐藤屋」に止宿したが、「ある先生」の勧告にしたがって、土樋のこの下宿に移ったという。

## 右下:第一学期医学科第一年級日課表 明治37年(1904)9月 当館蔵

周樹人入学直後のカリキュラム。朝7時乃至8時から午後は2時まで、という時間割であった。藤野教授の解剖学は、週4コマ組まれている

## 左下:周樹人への入学許可書交付指令案 明治37年(1904)9月 当館蔵

「清国留学生/周樹人/本校医学科へ入学許可可」という入学許可書を周樹人に出すことを指示した文書の案。周樹人の入学は7月の医専入試合格発表の際すでに公表されていたが、本人宛の入学許可書の発行は、授業開始直前の9月に入ってからだったらしい。末尾には朱筆で「本人へ入学金及授業料免除ノ事」とある。免除された授業料は時計に化けたと、彼は友人への書簡で語っている。



日	日七時至八時	日八時至九時	日九時至十時	日十時至十一時	日十一時至十二時	日一日至二時	日二時至三時
月	休息	普通科	解剖学	普通科	物理學	化學	
水		組織学	化學	物理學	普通科	解剖学	
木		解剖学	解剖学	普通科	普通科	解剖学	
土		普通科	普通科	化學	解剖学	普通科	
日	解剖学	普通科	解剖学	普通科	物理學		

# 藤野巖九郎先生

「私の講義は、筆記できますか」と彼は尋ねた。

「少しできます」

「持ってきて見せなさい」

私は筆記したノートを差出した。彼は、受け取って、一、二日してから返してくれた。そして、今後毎週持ってきてみせるように、と言った。持ち帰って開いてみたとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えられているばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。それは彼の担当の学課、骨学、血管学、神経学が終わるまで、ずっとつづけられた。

(「藤野先生」)



(©Tohoku University Archive)

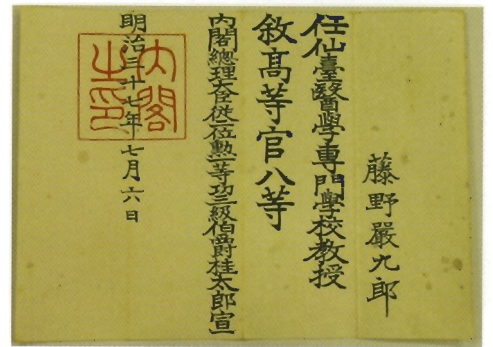
藤野先生こと藤野巖九郎は、1874年(明治7)福井県に生まれ、愛知医学校卒業後同校の教員を経て、1901年(明治34)10月に仙台医専の解剖学担当講師として仙台医専に招かれ赴任した。周樹人が仙台に来たときには30歳で、この年教授に昇任している。

「藤野先生」によれば、最初に授業を受けた約一週間後の土曜日、藤野教授の研究室に呼び出された時から、ノートの添削がはじまったという。添削は講義が行われている間毎週続けられた。解剖実習など実習的な科目に移ってから、よく研究室に呼び出されては指導を受けていたという。

1926年、魯迅は仙台時代をテーマとした「藤野先生」を著し、こう評した。

彼の私にたいする熱心な希望と、倦まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生まれることを希望するものである。大にしては學術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。彼の性格は、私の眼中において、また心理において、偉大である。

のち岩波文庫として『魯迅選集』が日本で刊行される際、魯迅は訳者の増田渉らに対し、何を選んでも良いが「藤野先生」だけは入れてほしい、と注文をつけた。退学以来音信の途絶えていた藤野先生と連絡が取れるかもしれない、と願つてのことだという。しかし1936年10月、再会を果たせぬまま魯迅はその生涯を閉じた。藤野が増田から送られた『藤野先生』を手にするのは、その3ヶ月後であった。



藤野巖九郎 仙台医専教授辞令

明治37年7月6日 /あわら市藤野巖九郎記念館蔵



仙台医専四号教室(「仙台医学専門学校在学記念帖」より)

当時の日課表によれば、周樹人入学頃の藤野先生等の講義科目は4号教室で行われた。最初の授業もここで行われたことだろう。



藤野教授研究室(「仙台医学専門学校在学記念帖」より)

入学直後のある土曜日、藤野教授は周樹人を研究室に呼び寄せノートを提出するよう指示した。

# 医学から文学へ —「幻灯事件」と「惜別」—

…講義が一くぎりしてまだ時間にならないときなどには、教師は風景やニュースの画片を映して学生に見せ、それで余った時間をうめることもあった。時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に関する画片が比較的多かった。私はこの教室の中で、いつも同級生たちの拍手と喝采に調子を合わせなければならなかった。あるとき、私は突然画面の中で、多くの中国人と絶えて久しい面会をした。一人がまんなかにはげられており、そのまわりにおおぜい立っている。どれも屈強な体格だが、表情は薄ぼんやりしている。しげられているのはロシア軍のスパイをはたらいたやつで、見せしめのために日本軍の手で首を斬られようとしているところであり、取り囲んでいるのは、その見せしめのお祭りさわぎを見に来た連中とのことであつた。

この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまった。（「呐喊」自序）

日露戦争のさなかに細菌学の授業で見た幻灯写真が、医学生・周樹人に文学者としての道を進ませる出発点となつたことは、初の小説集『呐喊』（1923）の自序以来魯迅がしばしば語るところである。その真実性については評価が分かれるが、仙台医専で幻灯機が使われ日露戦争に関するスライドが上映されたことは、現在残されている資料からも確認できる。少なくとも医専教室で見た幻灯写真が、藤野先生の思い出と共に、留学生・周樹人、作家・魯迅の記憶の中に、重要な意味を持って永く留められていたことは認められよう。

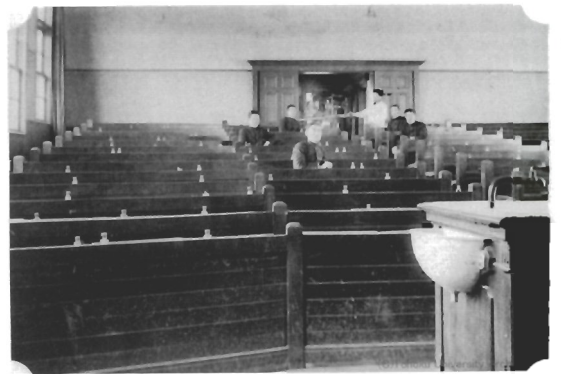
肉体ではなく、精神の改造こそが中国の人々にとって必要だ、との思いを強めた周樹人は、1906年（明治39）春に仙台医専を退学する。退学を報告する周樹人に悲哀の色を浮かべ嘆息した藤野先生は、仙台を去る数日前彼を家に呼び、裏に「惜別」と二字書かれた写真を一枚手渡した。

その後東京に戻つた周樹人は、早速「精神の改造」を実践するための文芸運動に取り組むが、やがて帰国。しばらくの「沈黙」を経て、1918年（大正7）、「魯迅」の名を知らしめた「狂人日記」を発表する。その後も鋭い筆致で次々と作品を世に送り出し、中国、そして日本でも、広くその名を知られていった。

藤野先生から送られた一枚の写真はこの「魯迅」の書斎に飾られ、彼の心を絶えず励ましつづけたという。

夜ごと仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰いで灯火のなかに、彼の黒い、瘦せた、今にも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を發し、かつ勇気を加えられる。そこでタバコに一本火をつけ、再び「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。

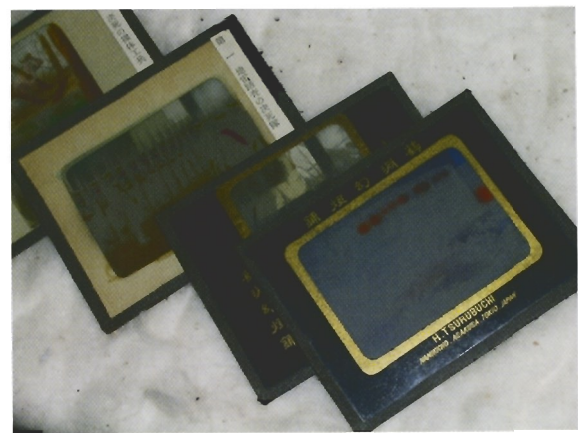
（藤野先生）



仙台医専六号階段教室の幻灯機

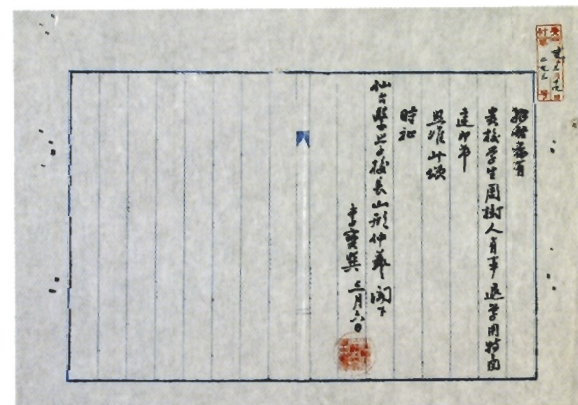
（「仙台医学専門学校在学記念帖」より）

現存する「階段教室」のかつての様子。幻灯機が置かれている。



仙台医専で使用された日露戦争幻灯用ガラス板

戦場の様子を伝える劇画風の絵。「呐喊」や「藤野先生」に出てくる処刑の場面は確認できない。



上：清国留学生監督李宝巽からの周樹人退学報告

（復原資料） 明治39年（1906）3月6日 当館蔵

左：日本人学生による送別記念撮影

明治39年（1906）3月

後列左端が周樹人

# 学都仙台・留学生小史

魯迅の来仙は、仙台における留学生史の開始を告げる出来事でもある。

彼が仙台に来た1904年(明治37)から、日中戦争開始より殆どの留学生が帰国する1937年(昭和12)頃まで、仙台では毎年絶えることなく新しい留学生が来ては、東北帝国大学や二高・医専・高工などの官立学校に入学していた。その数は1942年(昭和17)までの統計で合計636人を超える。このうち中国人留学生は414人(専攻生含む)である。

戦前期において最も多くの留学生が集まっていたのは、魯迅が仙台を去って間もない1908年(明治41)から1911年にかけての時期である。この頃から第二高等学校、仙台医学専門学校、仙台高等工業学校の官立(国立)3校で本格的な留学生受け入れが始まり、1911年初頭には3校あわせて60人を超える数の留学生が在仙していた。

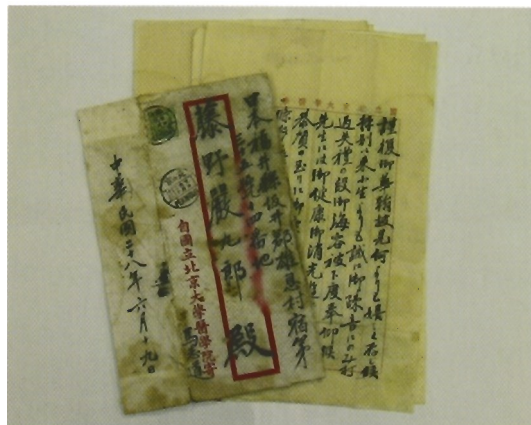
1912年(明治45)に入学者数が激減するが、これは前年の辛亥革命の影響によるものである。この時在学中の留学生も多数帰国したが、このとき仙台医専の生徒は、千葉医専を中心とする他の医学専門学校の留学生と連携して戦地での救護活動にあたる「紅十字隊」を結成した。当時学校側は、事態が沈静化したあと再び学問を継続する意思がある場合には復校を認める、との方針で彼らを送り出している。医学生が旅立つ当日の駅のホームには、彼らを見送る藤野徹九郎先生の姿があったという。

仙台初の外国人「大学生」は、1915年(大正4)に東北帝国大学理科大学の化学科に入学した鄭貞文。鄭氏は第二高等学校の卒業生でもある。その後1920年頃からは継続的に中国人留学生が東北帝国大学に入学するようになり、その数も、変動を見せつつ徐々に増えていった。もちろん、のちに中国や台湾・日本等で重要な業績を残した留学生も少なくない。1920年に入学した陳建功(1893-1971)は、同じく理学部の数学教室出身の蘇歩青(1902-2003)とともに中国における近代数学の開拓者として国際的な業績をあげ「陳蘇学派」として知られた。九州帝大卒業後の1923年から数年間東北帝大に籍を置いた陶熾陶晶孫(1897-1952)も、優れた医学者であるとともに、魯迅に続く世代の文学者として、郭沫若・郁達夫らと共に活躍した。上海在住中の魯迅とも親交を結んでいる。

1930年(昭和5)には東北帝国大学で留学生の大量受入が計画された。しかし中日関係の悪化によりこれは十分実現せず、逆に1938年(昭和13)以降は日中両国が交戦状態となり、中華民国政府の留学生派遣は停止された。

戦後も中華人民共和国からの留学生は永く途絶えていた。しかし1979年(昭和54)以降の改革開放路線により日本留学は本格的に再開され、近年その増加は著しい。

2003年(平成15)の統計によれば、東北大学に在学する中国人留学生は385人、韓国台湾を含む東アジア地域全体では647人を数えている。



仙台医専を卒業した留学生から藤野先生への書簡  
福井県あわら市 藤野徹九郎記念館所蔵



上: 日本初の外国人理学博士

陳建功(3列目中央)

(大正12年数学教室卒業記念)

蘇歩青とともに中国近代数学の創設者として活躍した。

右: 仙台日華学友会会章

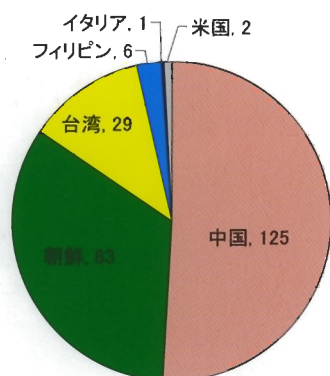
1913年(大正2)月 当館蔵

二高、仙台医専・仙台高工の官立3校の留学生・日本人学生34名を発起人として結成した親睦組織。



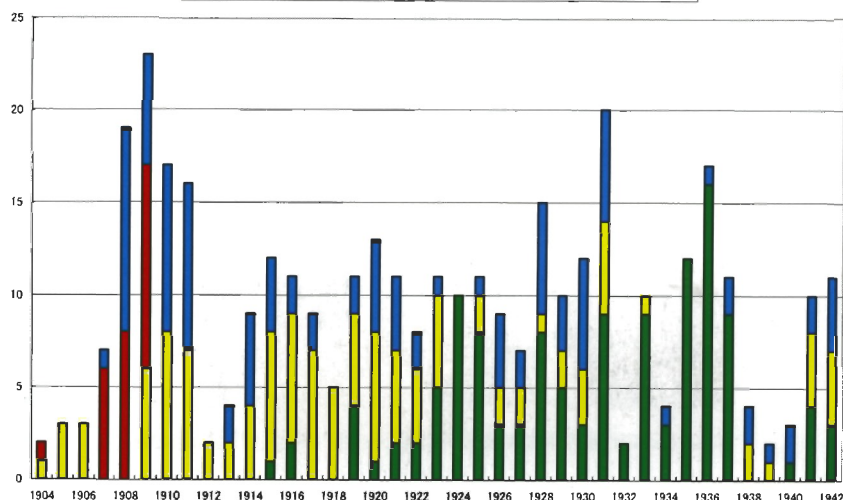
東北帝国大学への留学者の出身地割合

(1942年以前の入学者)



在仙官立4校の中国人留学生入学者

■東北帝大 ■第二高等学校 ■仙台医学専門学校 ■仙台高等工業学校



# 魯迅ゆかりの地散策 —「階段教室」とその周辺—

魯迅が留学していた頃、現在の片平キャンパスには、第二高等学校と仙台医学専門学校という二つの学校が置かれていました。正門は二高・医専とも片平丁に面した現在の二高記念苑付近に設けられていましたが、医専の校舎は東よりあったため、医専生はもっぱら東門(現在の流体科学研究所西側付近)を使ったと言います。当時は桜小路(一番町の延長。現在の北門に通じる道)より東側は市街地で、東門からこの通りに出た付近にあった「晩翠軒」というミルクホールに、魯迅はよく出入りしていたと言います。

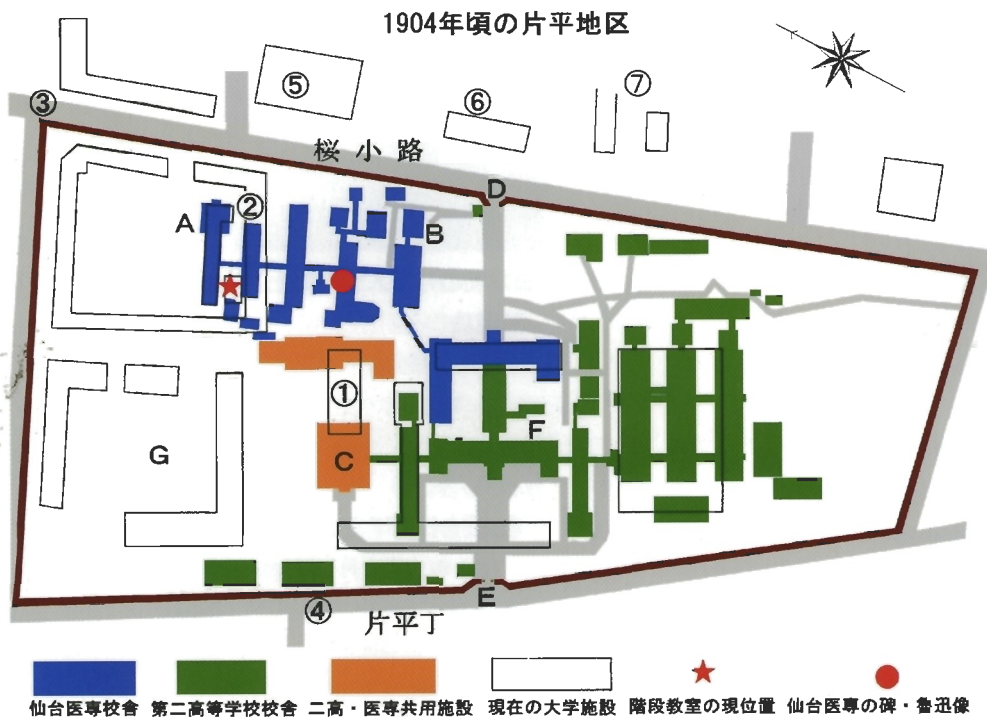
「魯迅の階段教室」として知られる写真の教室は、仙台医学専門学校六号教室として1904年(明治37)に建設されたものです。建設当時は現在のやや北東に180度向きを変え、今も隣に残されている旧博物・物理教室(現情報公開室・キャンパス計画室)とつながっていました。片平キャンパス時代の仙台医専の教室としては最大かつ最新の教室で、室内には最新の幻灯機が据えられていました。

東北大学が創設されたのは魯迅が仙台を去った翌年の1907年(明治40年)。片平キャンパスに大学の建物が建てられるのはさらに4年後の1911年(明治44年)になります。その後大正末～昭和初期の片平キャンパス大改造のなかで、六号教室は大学本部や理学部化学科の講義室へと改造・移設され、現在のような姿となっています。

※階段教室の見学は予約制です。御希望の方は東北大学国際交流課までお問い合わせ下さい。



旧仙台医専六号階段教室  
(見学には予約が必要です)



東北大学史料館展示室  
東北大学の歴史に関する展示を行っています。

## 現在の建物

- ① 東北大学史料館
- ② 大学本部
- ③ 東北大学北門
- ④ 東北大学正門
- ⑤ 本部2号館
- ⑥ 流体科学研究所
- ⑦ 素材工学研究棟

## 1904年頃の建物

- A 仙台医専六号教室(現存「階段教室」)
- B 同四号教室
- C 第二高等学校講堂
- D 東門
- E 第二高等学校・仙台医専正門
- F 第二高等学校本館
- G 運動場

## 魯迅先生東北大学留学百周年記念特別展パンフレット 魯迅 歴史のなかの留学生

平成16年10月 発行 東北大学 編集 東北大学史料館

980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1

電話 022(217)5040 FAX 022(217)5042 URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp>

資料協力: 福井県あわら市 / 写真提供: 仙台における魯迅の記録を調べる会 / 魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会

文中、魯迅の作品の訳文は増田渉・松枝茂夫・竹内好編『魯迅選集』岩波書店に、書簡の訳文は『魯迅全集』14(1985 学習研究社)によっています。